

yomoyomo 2019

図書委員会だより「yomoyomo」第78号 2019年11月 岸産高図書委員会

『面白くて眠れなくなる数学』

桜井 進/PHP研究所

生徒の皆さんは数学に対してどのようなイメージを持っていますか？『なんでこんなことをしないといけないのか』こんな言葉を多く聞きます。数学とは世の中のあらゆる現象を教えてくれる言葉であり、道具です。日常の風景に目を向けてみてください。そこには初めて見る数学の世界が広がっています。桜の花びらには√記号が、カードの会員番号には因数分解が…『えっ！そんなところに数学が?!』こう感じる事が日常の生活の中には多くあります。皆さんの知らない数学の世界に一度足を踏み入れてみませんか？最後に数学者の美しい名言を送ります。『数学を知らない者には、本当の深い自然の美しさをとらえることは難しい by ファインマン』

数学科 橋本哲志先生



■「yomoyomo」は、各ホームの図書委員が図書館所蔵の本の中からオススメ本をレビュー形式で紹介いたします。今号は三年生が担当しました。先生方からのオススメの一冊も必見です。

『ちいさな城下町』

安西水丸/文藝春秋

この本はちいさな城下町を10紹介しており、その中に岸和田市もあります。著者の安西水丸さんが各地に出向き、感じたことなどをつづっている紀行文です。岸和田市で訪れた場所は、本徳寺と岸和田だんじり祭り。また、安西さんは岸和田出身の著名人を紹介されていますが、愛煙家数人で酒を飲みつつ談笑する「煙の会」でコシノジュンコさんと親しくなられたようです。コシノさんはだんじり祭りについて、岸和田男子の心意気を見せる晴れの舞台だと情熱的に語っておられたそうです。

城と歴史をこよなく愛した安西さんの、味わい深い紀行文エッセイをぜひ手に取ってご覧ください。

3H

『きょうの日は、さようなら』

石田香織/河出書房新社

この物語は、離ればなれになっていたキョウコとキョウスケという連れ子どうしの義理の姉弟が、十数年経って再会する東の間の幸せな時間が描かれています。救われるようで救われない、自分の道を歩く二人を見ていると、何気ない日常を傍らで過ごしてくれる人——家族でも友だちでも誰でもいいけれど——、そういう人たちがいるから今自分は生きていけるのだと思いました。誰よりも大切な、かけがえのない家族。今日はさよならだけれど、また会えるといい、そんなことを感じた切なく温かい、どこか不思議なお話でした。皆さんにもぜひ読んで、体験してほしいです。

4H

『ありがとうは僕の耳にこだまする』

東田直樹/角川書店

この本は、会話のできない重度の自閉症である東田直樹さんの、「会話はできなくてもこの気持ちを誰かに伝えたい。」という想いが綴られた全84編の詩集です。自閉症である東田さんは、小さい頃から健常者との違いに辛さを抱きながらも、多くの人たちのために精一杯生きておられます。そんな思いが随所に感じられる作品でした。東田さんは誰かから言われた「ありがとう。」という言葉、いつまでも忘れることはなく、それがずっと彼の耳の中でこだまし続けている。この本の題名にはそんな作者の思いが込められていると感じました。皆さんもぜひ読んでみて下さい。

6H



『HELLO WORLD』

野崎まい/集英社

『HELLO WORLD』は、今秋公開されたSFアニメ映画の原作小説です。主人公の少年（堅書）は「未来から現れた自分」から、3ヵ月後に付き合う運命にある恋人が事件死するという衝撃の事実を知らされます。その運命を変えるため協力するふたり。しかし、未来から来た自分には、もうひとつの本当の理由が……。広い時間軸にハラハラするシーンや面白いシーン、感動のシーンのすべてがギュッと詰まっています。皆さんの想像を超えるクライマックスは、広く、深く、迫力のあるものになっています。是非この本を一度手に取って読んで下さい。初めての感動があなたを襲うでしょう。

1H

『ピンク・バス』

角田光代/角川書店

『ピンク・バス』という小説は、主人公のサエコの妊娠が判明した瞬間、長い間消息不明だった夫の姉の夏実子が突然家に押しかけてきて、サエコの家庭やそれまでの生き方がかき乱されてしまうという話です。ある日夏実子はピンクのバスに乗ってどこかへ行ってしまう。私は夏実子やピンクのバスは、何かの例えだったのかなと思いました。日常だけれど非日常でもあり、ハラハラするような不安定さがありました。夏実子の存在が、サエコの流し去ったはずの記憶を呼び戻すところが、とても印象に残っています。タイトル名からは想像もできないような世界観のある作品でした。

7H

『おちくぼ姫』

田辺聖子/KADOKAWA

「つやつやと黒く長い髪、薄紅色のまるい頬、つぶらに澄んだひとみをもった美しい女性がいました。貴族のお姫さまなのに意地悪い継母に育てられ、召使同然、粗末な身なりで一日中縫い物をさせられている。」これは千年も前に日本で書かれた平安時代のシンデレラのお話です。ストーリーはとても軽快で、スリルあり、恋愛ありの内容です。一度読むともう目が離せないほど引き込まれます。テンポの良い簡単な言葉で書かれているので誰でも読みやすいと思います。皆さんもぜひ千年前の和風シンデレラ物語を楽しんで下さい。

2H

『学校へ行けなかった私が「あの花」「ここさけ」を書くまで』

岡田磨里/文藝春秋

著者岡田磨里さんは、代表作である『あの日見た花の名前を僕はまだ知らない』を執筆後、長編アニメ映画『心が叫びたがってるんだ。』の脚本に取り掛かった。それが完成後、彼女の故郷である埼玉県秩父で行われた上映会で、あるトラブルに遭遇した著者は、自身の過去と原体験に向き合うことになった。この自伝はそのようなきっかけから、かつて自分は引きこもりの少女時代を過ごしたことを読者に告白し、いかにして外の世界に脱出して、アニメ脚本家となったかを、事実と少々のフィクションも交えて伝えている。『ここさけ』を見た人はもちろん、見ていない人にも読んでほしい一冊です。

5H